【解説】

第１問　　世界史上の都市

Ａ

問１～問３は中国歴代王朝の都に関するものであるが，後見返しの「中国史のまとめ」の[2]を見ればわかるとおり，都市名そのものも変遷するので注意を要する。隋唐代までの都は，魏晋南北朝時代のような分裂期を除いて，長安(大興城・鎬京)か洛陽(洛邑)に置かれる。これは，黄河流域の穀倉地帯を背景にしている。しかし，宋代以降は，長江流域の穀倉地帯の発展や大運河の整備によって，これらに近い開封・臨安・北京・南京が都となる。後見返しの地図を見て，河川や運河と都との位置関係を把握して欲しい。

問１　正解②　（長安と洛陽の歴史）[1]

①P. 110 の[1]の年表で確認。都の変遷は緑字で示されている。光武帝は漢の再興にあたって洛陽(b)を都とした。当時，長安に比べて経済的機能が高かったと考えられている。

②P. 119 参照。唐長安城の巨大さに注目。また，街路整備を含めたプランが日本の都城に採り入れられたことは，よく知られている。

③P. 114，115 参照。三大石窟の場所は必須事項であるから，対応する都市名とともに整理したい。造営が始まった南北朝時代の中国仏教の姿を反映している。

④P. 114 の地図[A]参照。蜀は内陸を支配し，都は成都であった。

問２　正解①　（開封と王安石の新法）[2]

宋の都は特殊で，北宋時代の開封(c)，南宋時代の臨安(e)ともに，統一王朝の都としては一代限りである。後見返しの「中国史のまとめ」参照。ただし，地図を見るとわかるとおり，開封は大運河と黄河の結節点，臨安(杭州)は運河の南端付近に位置しており，経済的重要性は大きい。

王安石の新法は P. 152 の[2]に詳しい。農業関係の青苗法・募役法，軍事的な保甲法・保馬法，商業面の均輸法・市易法のように分類しておくのも，１つの方法であ

る。王安石については，神宗に登用されたことはもちろん，司馬光との対立，唐宋八大家の一人であることなども，把握しておきたい。

ちなみに，明代の神宗は万暦帝のことで，一条鞭法の施行で知られている。P.166 の1参照。

問３　正解②　（南京・杭州の歴史） 3

①P.251 の地図B参照。四川暴動や武昌蜂起の位置を確認しておきたい。これ以外に辛亥革命期では，北京・南京の出来事を区別しておく必要がある。

②P.281 の年表および P.275 の地図C参照。日中戦争に関しては，盧溝橋事件・柳条湖事件などの位置も重要であるが，南京虐殺や汪兆銘政権など南京を舞台とした事柄も大切である。

③P.114 参照。東晋の都は建康(d,南京)である。司馬睿・司馬炎・司馬遷は間違えやすいので整理しておきたい。

④P.274 の1の年表で，この文が西安事件を示していることを確認できる。西安はかつての長安である。後見返しの「中国史のまとめ」で確認しておきたい。

B

問４　正解③　（高麗と朝鮮の都） 4

P. 174 の年表で王都の変遷を確認。朝鮮半島は中国の影響の大きい場所である。年表中の青字が文化史であるから，仏教・儒教関係を中心に整理し，各国のイメージを高めておきたい。

問５　正解③　（朝鮮の歴史） 5

①P. 175 に李舜臣の人物コラムがある。②～④の各事項も P. 174 の年表を見れば確認できる。

問６　正解①　（18 世紀の出来事） 6

a P. 170 の 1 を見ると，康熙帝が広州に公行を創立したことを確認できる。ここを通じた外国との貿易の様子は，P. 248 の 2 を参照。ちなみに，公行の廃止によって自由貿易への一歩が踏み出されるのは，南京条約の時である。これは，P. 250 の表で確認できる。

b ギルドの仕組みや問題点については，P. 144 の 4 に詳しい。フランス革命が典型的な市民革命であり，ギルド的規制がブルジョワジーの不利益につながることを想起したい。

C

問７　正解④　（デフォー） 7

文化史をうまく把握するには，時代背景や政治史との関係を整理し，枠組みをイメージするのが近道。やみくもに覚えようとするだけでは，なかなか難しいので，教科書や図表の解説文も大切に利用したい。

①P.208 参照。レンブラント「夜警」はバロック絵画。バロックの特徴は，異なる二つの要素の混在にある。図表には大きく掲載されているので，絵画の中央付近がスポットで照らされたように浮かび上がる，明暗の技法を感じてもらいたい。

②P.209 参照。ミルトン『失楽園』はピューリタン文学の代表的存在。

③P.206 参照。ニュートンの発見は，ヨーロッパ自然科学の発展を象徴する。

④P.209 参照。イギリスでは，市民的な文学の発展も早期に訪れた。デフォー『ロビンソン=クルーソー』は，イギリス風刺文学の好例。

問８　正解③　（自由貿易や経済活動の自由） 8

①P.207 参照。アダム=スミスは重農主義を批判的に受け継ぎ，自由放任を唱えた。

②アダム=スミスの経済学はリカードやマルサスに受け継がれた。P.240 参照。一方，「先進国」イギリスと違って，国内の統一の遅れていたドイツでは，保護主義を基調とする経済学が生じる。リストは保護貿易を主張し，ドイツ関税同盟の成立に貢献した。

③19 世紀前半のイギリスは，ウィーン体制という保守的な秩序の中にあって，自由主義をめざす特異な存在である。P.226 の 1 や 2 で主な政策を整理したい。審査法廃止・第１回選挙法改正・穀物法廃止・東インド会社解散など，順序も大切である。

④イギリスのインド支配は頻出事項。ここも，事項の順序が大切である。P.244 の 1 で，プラッシーの戦い・ベンガルなどの徴税権獲得・東インド会社の商業活動停止・インド大反乱・東インド会社解散・インド帝国成立などの事項を，ピックアップして意義を理解したい。

問９　正解①　（マンチェスター） 9

P.213 の$\boxed{1}$を見ると，18 世紀末までに綿工業の革新を一段落させたイギリスが，19 世紀に入ると，交通革命に向かったとわかる。中でも重要な役割を果たしたのが，綿工業都市マンチェスターと綿花輸入港リヴァプールを結ぶ鉄道である。P.214 に地図がある。この２都市は人口増加も特に著しく，P.214 のグラフでそれを確認できる。

第２問　　世界史上の貨幣

Ａ

問１　正解①　（リディアの貨幣鋳造と秦の半両銭） 10

リディアの鋳造貨幣については P.75 参照。アッシリア滅亡後の４王国分立の時代に関しては，地図的な把握も不可欠であるから，同時に見ておきたい。

中国の春秋戦国期の青銅貨幣については P.107 参照。秦代の半両銭は P.109，武帝期の五銖銭は P.110 にある。

問２　正解②　（魏晋南北朝時代の文化） 11

①P.118 を見ると，韓愈・柳宗元は唐宋八大家に属することがわかる。彼らの唱える古文復興が，魏晋南北朝時代の四六駢儷体に対するものであることを理解しておけば，時代感覚もつかみやすい。

②王羲之の書は P.115 にある。唐代の顔真卿と区別できるようにしたい。

③女史箴図は顧愷之の作と伝えられる。P.115 に載っている。

④南朝の貴族的な文化に対する，北朝の実用的な文化，という図式はイメージしておきたい。P.115 の表を見てほしい。『斉民要術』は北朝実学の代表的著作。

問３　正解②　（16 世紀の出来事） 12

P.44，45 を見ると，①③④が正しいのはわかる。

チベット仏教と中国・モンゴルとの関係は盲点になりやすい。P.121 には唐の太宗と吐蕃のソンツェン=ガンポの関係，P.171 にはチベット仏教の改革が載っている。

B

問４　正解④　（元代の紙幣） 13

布銭は韓・魏・趙で流通した青銅貨幣であり，紙幣ではない。P.107 参照。中国における貨幣の変遷については後見返しの「中国王朝の変遷」にまとめられているので，見ておきたい。

問５　正解③　（フィレンツェの位置とメディチ家） 14

中世以降のヨーロッパ都市の繁栄は，商業の発展と切り離すことができない。P.144 で，フランドル地方・シャンパーニュ地方・北ドイツ・南ドイツ・北イタリアのそれぞれの役割，主な都市などを整理しておきたい。

アウクスブルク(a)は銀の産地で，メキシコ銀の登場以前に重要な役割を果たす。ここで権勢をふるったのがフッガー家である（P.144 の 2 参照)。また，フィレンツェとメディチ家の関係，さらにイタリア=ルネサンスとの関わりについては，P.189 に詳しい。

問６　正解①　（13･14 世紀の南アジア） 15

今年度のセンター試験では，このように横の関係を問うものが目につく。P.39 を利用して，①が正しいことを確認できる。ヴィジャヤナガル王国はムガル帝国と対抗したヒンドゥー国家であり，P.180 の 1 の年表で横の関係を確認しておきたい。近年，東南アジア史が注目されてきた関係で，南インドのことも話題にのぼることが増えつつある。盲点を無くすため，P.99 の 2 なども活用して欲しい。

C

問７　正解②　（ラテンアメリカの歴史） 16

①ラテンアメリカの独立についてはP.224参照。ブラジルはポルトガルからの独立である。スペイン以外からの独立としては，ハイチにも注目。

②P.234の地図Aを見て，アメリカの領土拡大過程について，どこの国から得たか，割譲で得たか，買収で得たか，などの視点から整理したい。メキシコの割譲範囲は，旧フランス領(ミシシッピ川以西のルイジアナ)に匹敵する大きさ。

③ラテンアメリカの戦後史まで手の回らない受験生も多いと思うが，アメリカの影響力の強い地域であるが故に，アメリカへの反発，あるいは，アメリカに支えられた資本家や地主に対する反発の存在も無視できない。P.307 を見ると，そのような背景を含めて，ラテンアメリカ諸国の政体分類が載っているので，参考にして欲しい。アジェンデ政権は，チリの人民連合政権。

④P.224 の地図Aでシモン=ボリバルの進路を確認。キューバはアメリカ=スペイン(米西)戦争の時に，アメリカの保護下で独立する。

問８　正解②　（金や銀にかかわる出来事） 17

①ガーナ王国についてはP.131に詳しい。サハラ交易は金と塩の交換で栄えた。

②P.234 の年表参照。ゴールドラッシュは，未開拓地を無くす重要な契機ともなった。

③トランスヴァール共和国とオレンジ自由国は，オランダ系ブール人の国家で，イギリスの植民地と化していく。P.257 を見て，南アフリカ戦争の経過や３Ｃ政策との関わりを確認したい。

④恐慌に際しては，国際収支のバランスを取る意味で，金本位制の停止が必要とされた。P.276の3で，米英仏が共通して停止に踏み切っていることを確認したい。

問９　正解②　（カルタゴとリビア） 18

a P.88参照。ポエニ戦争の勝利が，土地問題などを引き起こし，ローマの共和政に大きく影響したことも，同時に確認したい。

b アフリカ分割の基本事項である。P.257の地図を何度も確認して，「慣れてしまう」

のが近道。

第３問　　海運の歴史

Ａ

問１　正解②　（東南アジアの歴史）19

東南アジア史は近年，教科書での扱いも増加しており注意を要する。

商業的な側面から，港市国家の概念を把握することが必要で，P.103 の4を参照したい。また，商業の発展は，様々な政治制度や宗教の浸透をもたらした。基本事項として，ヒンドゥー系・大乗仏教系・上座仏教系・儒教系・イスラーム系の整理くらいはしておきたい。これも，P.102 の下の年表で色分けされている。

①オケオそのものの解説は P.103。港市としての役割をきっちり確認するため，P.17 の地図も参照して，交易ルートとの関わりを把握したい。ピューはビルマに存在していた。全体地図では P.23 の地図くらいから登場する。

②11 世紀以降の東南アジア大陸部は，上座仏教化を含めた変革の波に覆われる。その起点とも言うべきパガン朝は重要な存在。P.35 や P.102 を参照。

③シュリーヴィジャヤはスマトラ島を中心に繁栄した港市国家（P.103 の写真③参照）。息の長い国家で，P.27 以降，各世紀の地図によく登場している。P.27 では義浄のルートの確認，P.29 ではシャイレンドラ朝との関係，P.35 ではチョーラ朝からの遠征など，注目事項も多い。

④アンコール=ワットとボロブドゥールは頻出事項である。P.101 で解説も含めた確認をしておきたい。

問２　正解①　（15～17 世紀の東南アジア）20

①P.211 の地図Aと地図Bを見比べて，列強間の勢力の移り変わりを確認したい。アンボイナ事件は，香辛料の産地で起こったイギリス・オランダ間の事件。

②マラッカはポルトガル領からオランダ領になる。P.44～49 を見ると，これに並行して，周辺にアチェ・バンテン・マタラムのイスラーム国家が成立したこともわかる。

③前述の通り，アチェはイスラーム系。ヨーロッパ諸国の東南アジア進出に対して，アチェなどイスラーム諸国家が対抗した（P.169 の地図D参照）

④　P.102 の下の年表で明らかなように，ベトナムを統一するのは黎朝。

問３　正解③　（古代ギリシアの軍船） 21

①②P.159 参照。

③P.81 参照。

④P.175 参照。

これら以外にも，ヴァイキングの船が P.136，ガレオン船が P.187 に載っている。

B

問４　正解②　（ペルシア湾，ティグリス・ユーフラテス川） 22

①P.76 の年表や地図で，パルティア・ササン朝が東西で対峙した国家を確認しておきたい。

②バグダードは単にティグリス河畔というだけでなく,キャラバン=ルートとの結節点にもなっていた。P.123 参照。

③P.178 で，アンカラの戦いを確認。ティムールに対する敗北は，帝国の中断をもたらした。

④ホルムズはペルシア湾に位置する。P.176 の年表で，サファヴィー朝のアッバース１世がポルトガル人の追放を達成したことを確認し，イスファハーンへの遷都も含めて，王朝の繁栄ぶりをイメージしておきたい。

問５　正解③　（19 世紀のアフリカ大陸） 23

①P.243 を見て，エジプトがアラビア半島やスーダンに勢力を伸ばしていることを確認したい。エジプト=スーダンはやがてイギリス領となった(P.257 参照)。

②スエズ運河については，P.243 のコラムに詳しい。

③イタリアは 19 世紀末，アドワの戦いに敗れる(P.257 参照)。一般に，エチオピア併合と称される出来事は，第二次世界大戦の直前のもので，P.279 の地図B で確認できる。

④P.257 の地図参照。

問６　正解③　（16 世紀のオスマン帝国と紅海） 24

P.178 で，歴代スルタンの治世を整理したい。メフメト２世以前に支配したのは概ね，アナトリアとバルカンである。メフメト２世の時代にコンスタンティノープルを陥落させ，黒海の周囲を支配する。セリム１世時代にマムルーク朝を滅ぼしたことでメッカ･メディナを庇護下におさめ,イスラーム国家としての地位を高めた。スレイマン１世時代は，北アフリカ支配とハンガリー支配に特徴がある。

C

問７　正解①　（バルト海沿岸の国や地域の歴史） 25

①P.280 の年表で，ソ連のポーランド侵攻とバルト３国併合を確認したい。この後，ドイツ軍がバルカン半島に入り，独ソ戦につながったことも見ておきたい。

②P.204 で，エカチェリーナ２世が啓蒙専制君主の一人であること，一方で，プガチョフの乱以降に農奴制を強化したこと，を確認しておきたい。あわせて，農奴制と関係の深いコサックやステンカ=ラージンの乱についても見ておいてほしい。

③ヨーゼフ２世はオーストリアの君主。P.202 の年表参照。プロイセンの代表的啓蒙専制君主はフリードリヒ２世。P.202 の年表で，オーストリア継承戦争・七年戦争に勝利したことを確認したい。

④P.136の 2 参照。アングロ=サクソン七王国の成立以降，ノルマン系の侵入が相次ぐ。アルフレッド大王に撃退されたデーン人，デンマーク王子クヌートによる征服，ノルマン=コンクェストなどの事項を順序よく整理してほしい。

問８　正解③　（航海や貿易） 26

①グロティウスについては，P.200 を参照。

②P.205 でクロムウェルについて確認。ジェントリ出身のクロムウェルは，アイルランド征服や航海法制定など，イギリス経済の利益となる政策を進めた。この時期に勃発したイギリス=オランダ(英蘭)戦争は，イギリスに覇権がうつる契機の一つとなった。

③P.283 の 2 参照。ＧＡＴＴはＩＢＲＤ・ＩＭＦとともに，戦後の経済秩序の基礎となった。目的は自由貿易の推進である。

④P.276 の 3 で，植民地を利用した恐慌対策を確認。日本・ドイツ・イタリアなどファシズム化していった国々との違いを整理しておきたい。

問９　正解②　（七年戦争） 27

七年戦争は，オーストリア・ハプスブルク家がプロイセンに対抗するため，宿敵フランス・ブルボン家と結んだのがポイント。P.203 で七年戦争の構造を理解したい。また，P.211 の「第２次英仏百年戦争」でわかるように，七年戦争はフレンチ=イ

ンディアン戦争と並行している。この結果 1763 年のパリ条約で，カナダやミシシッピ川以東のルイジアナが，仏領から英領になった。

　アウステルリッツの戦いはナポレオンの時代。P. 220 参照。

第４問　　民衆の異議申し立て

Ａ

問１　正解②　（ヨーロッパ各地で起こった抗争や反乱） 28

①シモン=ド=モンフォールの反乱は，イギリス議会政治の発展の流れで出てくる。歴代国王と貴族・市民側の動きを P. 148 の 2 で整理しておきたい。

②アナーニ事件や教皇庁のアヴィニョン移転に示される教皇権の衰退は，ウィクリフやフスの教会批判を生み出した。P. 146 で確認し，さらに，P. 194 の年表で，宗教改革へのつながりも見ておいて欲しい。

③④P. 146 の 1 参照。ジャックリーの乱・ワット=タイラーの乱は，中世末期の変化，つまり封建制の崩壊過程の中で理解したい。図式を有効に利用して欲しい。

問２　正解③　（15 世紀の教会をめぐる動き） 29

歴史的事象の順序に注意。P. 148 の年表を見ると，以下の流れがわかる。

14 世紀初頭にアナーニ事件

その直後，教皇のバビロン捕囚＝アヴィニョン移転

14 世紀後半から教会大分裂

14 世紀末から 15 世紀初頭にかけてウィクリフ・フスの教会批判

1414 年からのコンスタンツ公会議でフスの火刑と教会大分裂の収拾

①だけは 11 世紀の出来事である。

問３　正解④　（ドイツ農民戦争） 30

ａ ドイツ農民戦争については P. 194 参照。指導者はトマス=ミュンツァーである。

ｂ シュマルカルデン同盟は，カール５世のルター派に対する態度が原因で結成された。P. 194 の年表を見ると，時期的にはドイツ農民戦争より遅い。

B

問４　正解②　（ハンガリーの反ソ暴動） 31

P.310 の年表にある，1953 年スターリン死去，1956 年フルシチョフのスターリン批判，の２項目に注目。これらを契機に，東欧諸国で自由化を求める動きが高揚することを，P.311 の年表で確認して欲しい。なお，フルシチョフの解任の背景には，キューバ危機での対応や中ソ論争発生があると考えられる。これも年表で確認できる。

問５　正解①　（ポーランドの歴史） 32

P.140 の年表で，ポーランドとリトアニアの連合やドイツ騎士団との関係を確認してほしい。16 世紀以降のポーランドの歴史については，P.203 の 3 を参照。

①P.203 参照。選挙王制による政治の混乱から列強によるポーランド分割を招いてしまう。

②18 世紀末に周辺国によって分割されたポーランドは，ナポレオン支配下でワルシャワ大公国の成立をみた(P.221 の地図 A)。さらにウィーン体制下でロシアの支配下に入った後(P.222)，第一次世界大戦でようやく独立する(P.266)。

③P.280 など確認。ドイツ軍がポーランドに進撃している。

④コシューシコについては，P.203 参照。ポーランド分割に抵抗した英雄。「連帯」を発足させたワレサ議長は，社会主義体制崩壊の波の中で，1990 年大統領となる。P.311 参照。

問６　正解①　（1848 年の出来事） 33

ウィーン体制崩壊を象徴する 1848 年は，極めて重要な年号である。P.222 の 3 をよく見てほしい。社会主義の台頭など，経済面の変化も存在する。ロシアのナロードニキ運動は，農民を啓蒙して社会主義的改革をめざすものであり，社会主義思想が生じた後，1870 年代の動きである。P.256 でロシアの行を見ておきたい。

C

問７　正解③　（中国の農民反乱） 34

中国諸王朝に関する整理は必須。後見返しに「中国王朝の変遷」があるので，うまく活用したい。

問８　正解④　（中国の宗教） 35

a P.115 の 2 で確認。寇謙之の新天師道は北魏太武帝の保護を受けた。魏晋南北朝時代は仏教も盛んであるから，南朝と北朝で活躍した渡印僧・渡来僧なども整理したい。

b 中国各王朝における，儒教・道教の変遷も必須事項なので，後見返しを利用して欲しい。全真教は華北支配下の金で成立した。

問９　正解④　（中華人民共和国の歴史） 36

P.294 の年表を参照。

①中ソ友好同盟相互援助条約は 1950 年。

②文化大革命については，毛沢東・劉少奇らの動きを含めて解説文を読んでおきたい。これは P.295 に詳しい。文化大革命は中国を混乱させるが，建国以来の立役者である毛沢東・周恩来が死去し，鄧小平が政界に復活する 1970 年代後半から，中国の様子が変わり始める。改革開放路線についても，写真⑩の解説文を見てほしい。中国の目覚ましい経済成長の原点である。

③日中国交正常化については，P.290 の 2 で，アメリカのデタント外交との関係を確認したい。対ソ連の軍事的封じ込めに限界を感じたニクソン大統領の訪中は，日本やソ連に衝撃を与えた。ニクソン訪ソや日中国交正常化は，この流れで理解して欲しい。日中平和友好条約は，鄧小平復活直後の調印で，国交正常化とは別物。

④中国経済発展の裏にある政治の閉鎖性・非民主性は，少数民族の暴動や天安門事件を引き起こしてきた。P.295 の写真⑨は，全世界に配信され，中国政府は激しい非難を浴びた。